第4章　この戦略を通して目指す熊本市の姿

この章では、この戦略の取組を実行していく上での基本理念を掲げ、2050 年までに、熊本市が目指すべき望ましい姿について提示します。

「基本理念」は、第 3 章で整理した熊本市の生物多様性の現状と課題を踏まえ、熊本市を将来どのような都市にしていくのか、市民がどのように暮らしていくのか、その目指すべき方向の基本的な考え方を簡潔に表現したものです。

「望ましい姿」は、基本理念が浸透し、実現したときの熊本市の理想的な状態をイメージしたものです。長期的な視点から熊本市が目指す姿として、基本理念をより具体的に表現しました。ここでは、約 35 年後の 2050 年の熊本市の姿をイメージし、市全域と、「みんなで未来に残したい熊本市の自然環境」6 地域について提示し、その姿を描いています。

4.1　基本理念

地球上には、数多くの生物が、互いに様々な関係で網目のようにつながりあい、また、生物を取り巻く環境との作用の中で存在しています。長い歴史の中で培われたこの生物多様性は、私たちに多くのめぐみをもたらし、私たちすべてのいのちと暮らしを支えています。

熊本市にも、固有の豊かな自然があり、豊富で良質な地下水、農作物や海の幸などの様々なめぐみを受けて人々は暮らしてきました。そして、その営みの中で独特の文化を育んできました。生物多様性は地域固有の財産と考えることができます。

しかし今、世界的にも、そして日本においても、生物多様性の損失が深刻になっています。熊本市においても、都市化の進行など、社会・経済的な変化の中で、生物の生息・生育環境の減少やつながりの分断、外来種の侵入による生態系のかく乱等の問題が進行しています。熊本市の自然や生物のつながりも、九州、日本、世界といった、よりスケールの大きな生物多様性の網目の一部と考えられます。熊本市においても、このままこうした問題が進行すれば、私たちはかけがえのない地域の財産を失うだけでなく、生存することさえ危機的な状況に陥ってしまうかもしれません。

私たちには、将来の世代が、私たちと同じように生物多様性のめぐみを受け、安心して豊かな暮らしを送ることができるよう、引き継いでいく責任があります。今、私たち一人ひとりがそのことを認識するとともに、そのための行動を起こしていく必要があります。

こうした考えに立ち、この戦略では、この行動を実行していくために、

「<u>自然のめぐみに感謝し、人と自然がともに生きるまち、くまもとを、みんなで実現する</u>」

を基本理念として掲げます。

4.2　熊本市が目指す 2050 年の望ましい姿

(1)　市全域

市民が地域の自然について関心を持ち、理解し、そのめぐみに感謝しながら、日々の暮らしや営みの中で、一人ひとりが生物多様性を守り、上手に利用しつつ次世代に引き継いでいくための行動をとっています。

そして、周辺地域を含めた森・里・川・海のつながりが維持され、市域にかかわらず、これらを守り、支えあう活動が広まっています。

市内では、ムササビやフクロウがすむ森やメダカがすむ河川や水路など、様々な生きものやそのすみかが守られています。

市街地や住宅地などでは、地域で大切にされてきたお寺や神社などとともに、古くから残されてきた樹林や巨木など身近な自然が受け継がれているだけでなく、公園や学校、事業所、庭、街路樹などとともに、豊かな緑のつながりが創り出され、「森の都」を思わせる街並みが広がっています。

里地里山や田園地域では、作物が豊かに実り、人工林、竹林などは利用されながら、適切に管理され、こうした環境で様々な生きものが育まれるとともに、美しい景観が形成されています。また、イノシシやシカ等の野生鳥獣が適切に管理され、野生動物たちとの距離が適切に保たれています。

湧水や河川から連なる小さな水路や小川には、トンボやサワガニ、メダカなどの豊かな生きものがすみ、こうした生きものが自由に移動できるようなつながりが形成されています。こうした水辺は豊かな湧水とともに大切にされ、初夏にはホタルも飛び交います。そこで、子どもたちは生きものにふれたり、水遊びをしたりしています。

そして、こうした地域の自然とそれに根ざした歴史・文化を活かした地域づくりや事業活動が浸透し、将来にわたって生物多様性に富んだ環境を守る取組を支えています。

市民は、こうした環境の中で、身近な自然や生きものを季節の変化とともに感じています。熊本市は、都市でありながら豊かな自然環境とそのめぐみにあふれ、人々は四季折々の祭りや行事、地域でとれた旬の食べ物などを楽しんでいます。

そして、人と人、人と自然がつながりあい、いきいきとした心豊かな暮らしが営まれ、そうした「くまもと」の姿が魅力的なものとして輝いています。

(2)　みんなで未来に残したい熊本市の自然環境

1)金峰山系

シイ林、カシ林など豊かな森林が守られ、人工林や竹林は必要な管理が適切に実施されています。豊かな湧水や山系から始まる川は、山麓部の田んぼを潤し、豊かな里の水辺の環境が地域の人たちの手で守られています。

市街地からも望むことができ、豊かな自然が残る熊本市の山の象徴でもあります。石畳の道・霊巌洞等の歴史・文化的な資源や、豊かで多様な環境が活かされ、登山のほか、自然を楽しみ、学び、体験できる場として人々に親しまれています。

2)立田山

コジイ林など自然度の高い森林が守られています。森林だけでなく、豊かな湿地の環境が残され､人々の連携した取組によってこうした環境が維持･保全されています。

市街地の近くにあって豊かな環境が守られていることで、多様な生きものの重要なすみかであるとともに、泰勝寺跡などの歴史・文化的な場所と一体となって、日常的な散歩やお花見などで自然に親しみ、また、野鳥・植物観察会などを通して、自然を体験・学習できる場となっています。

3)雁回山（木原山）

多様なシダ植物やムササビなどの動物がすむ自然豊かな森林が守られています。自然環境に関する調査や研究が行われ、情報が蓄積されています。

木原不動尊など信仰や歴史的な背景のある場所として活かされているとともに、身近なハイキングや野鳥・植物観察会などを通して、自然を体験・学習できる場として市民に親しまれています。

4)水前寺・江津湖

豊かで清れつな湧水が回復し、外来種対策の進展など、様々な人々の連携した取組により、水辺の生態系が守られています。ヒラモなどの水草や、多様な水鳥、タナゴ類やメダカなどの魚、水辺に集うトンボやホタルなど、江津湖本来の水辺の多様な生きものが見られます。

熊本市の地下水の象徴として、市民に大切にされています。そして、水前寺成趣園とともにその魅力が発信され、市の内外から多くの人が集い、熊本市の水の豊かさ、歴史･文化を実感し､水辺で休息したり遊ぶことのできる観光の拠点になっています。また、隣接する動植物園では生物多様性について学び、江津湖では実際に観察し、ふれ、体験することができるフィールドとして、熊本市の生物多様性の学習の拠点にもなっています。

5)白川・緑川

生物多様性に配慮した河川管理によって、河川の連続性が確保され、様々な生きもののすみかが守られています。

熊本市を流れ、周辺地域の森・川をつなぐ大動脈であるとともに、身近な小川や水路につながり、田んぼを潤しています。こうした小さな水路などは、地域の人々の手による適切な管理で守られ、身近な生きもののすみかとなっています。

こうした川を通じたつながりが認識されるとともに、生きものの観察などの活動も広がる場となっています。

6)有明海（干潟）

自然の海岸と広大な干潟が良好な状態で保全され、シオマネキなどのカニ類や、ムツゴロウなどの魚類など、豊かな生きもののすみかとなっています。春や秋の渡りの時期には多くのシギ・チドリ類がやってくる環境が保たれています。

資源管理などにより、アサリやハマグリの生産量も回復し、将来にわたり賢く使っていく、めぐみ豊かな生産の場としても、みんなの手で守られています。

干潟の生きものの観察を通して、自然にふれあい、学ぶ場としても親しまれています。

図 4.2-1　熊本市が目指す 2050 年の望ましい姿